

特 230

921

東方佛教協會編

佛教文化辭典

別冊附錄
佛教文化大講座



始



持 230
921

は皆國建にして、聖德太子及高僧像十幅・外數點の國寶を藏す。

一 乘止觀院、イチジヨースカンイン（寺名）

滋賀縣滋賀郡坂本村比叡山上にあり。天台宗の總本山。根本中堂とも云ふ。法華一乘の止觀をなすより斯く名づける。始め延暦七年桓武帝の勅願に依り最澄之を草創し、藥師佛を本尊として安置し比叡山寺と號した。當時此の藥師堂の外に文殊堂と經堂があつて藥師堂が中間にあつたから根本中堂とも云ふ。後に一乘止觀院と改め、延暦寺の中樞をなす。現今の建築は寛文七年の造立桁行十九間梁行十二間半、軒の高さ五間余、中堂寶前の常燈は最澄手づから燧を鑽つて點した三燈を後慈惠が一燈に統べたもので、幾多の兵火炎燒の事ありしも此の燈は滅せずと傳ふ。〔參照〕『扶桑略記』。

『叡岳要記』・『近江輿地誌略』・『諸門跡傳』

一 乘眞實三乘方便、イチジヨースンジツ サンジ

ヨーパーベン（術語）

一 乘家（天台宗・華嚴宗等）が自らを眞實の教とし、三乘家（法相宗等）を權方便の教とするをいふ。支那にて一乘三乘の兩家がおの／＼自家の立場を眞實として互に諍つた。一乘家は平等觀に立ち、成佛について衆生全體の可能を説くが、三乘家は差別觀を本とし、一部の者の成佛不能を説くそこで一乘家は自家の立場から三乘家を以て理義を盡さぬ權方便教とする。

一 乘眞妙正法、イチジヨースンミヨノシヨ

ーパー（術語）

眞宗にて南無阿彌陀佛の不行を歎じたる語。不行は是れ本願一乘の法なるが故に一乘と云ひ、それ

の眞實微妙なるを略して眞妙といひ、方便邪曲の法にあらざるを正法と云ふ。『淨土文類聚鈔』に出づ。

一 乘 機 イチジョーノキ (術語)

一乘法を信行するに堪へ、又は信行する人と言ふ華嚴・天台・淨土宗、眞宗等の一乘法を信受し行持する人を指す。一乗家ではかゝる一乗の機は容易に得られぬものとし、宿世よりの又は多年の修養によつて、漸く此機能が成熟するものとする。

一 乘 極 唱 イチジョーゴクシヨ (術語)

一乗の教は極理の説であると云ふ意。佛教思想に小乗・大乘があり、更に大乘に三乗・一乗の別があるが、そのうち一乗が最高最深の眞實教であると一乗家は主張する。三乗家は勿論之に反對する。

一場 懺 悔 イチジョーノモラ (禪語)

懺悔は梵語、慚愧と譯す。俗語の所謂「ヨキ懺悔ラシ」といふこと。次の如き場合に用ひられる。『從容錄』第二十八則に「僧、護國に問ふ、鶴、枯松に立つ時如何。國曰、地下水一場の懺悔。僧云滴水凍の時如何。國曰、日出て後一場の懺悔。僧云、會昌沙汰の時、護法善神なんの處に向て去るや。國曰、三門頭の兩箇、一場の懺悔」と。

一 乘 分 教 イチジョーブンキヨ (術語)

元曉所立の四教の一。『梵網經』・『瓔珞經』等に説く教理をいふ。

一 乘 滿 教 イチジョーマンギヨ (術語)

元曉所立の四教の一。華嚴の教理をいふ。四教。

一 乘 無 上 眞 實 信 海 イチジョームジヨノシンジツシンカイ (術語)

一條 派 イチジョーハ (派名)

西谷派とも光明派ともいふ。淨土宗鎮西派六派の一。一條淨華院の住せし禮阿慈心を祖とする一派をいふ。慈心は京都仁和寺西谷の光明院に於て弘教す。著作に『大經聞書』四卷『淨土要略鈔』一卷『心行雜決』一卷あり。もつて其派義を伺ふべし。〔參照〕『決疑鈔直牒』卷九。

一 質 不 成 イチゼツフジヨ (術語)

三不成の一。淨土は淨等より生じ穢土は穢業より生ずるが故に淨土と穢土とはその本質は全然同一でないといふ説。

一 禪 イチゼン (術語)

また初禪といふ。小乗では色界中に四禪ありと云ひ、その四禪中の第一位をいふ。此位にありては欲界の惡を離れて喜樂を生ずと。

親鸞が他力の信心を嘆稱した語。『今斯の深信は他力至極の金剛心、一乘無上の眞實信海也。』(『愚禿鈔』) 彌陀の本願海は佛教の終歸であつて此上のない法であり、この法を受くる眞實の信心は、如何なる惡をも擲して皆眞實たらしめる所からかく名づく。

一 乘 要 決 イチジョーヨーケツ (書名)

三卷。天台宗源信撰。佛性の問題につき天台一乗家の立場から、一切衆生悉く成佛の可能なるを論じ、三乗家の説を排斥したるもの。八章に分る。一法華によりて一乗を立つ。二、餘教の二乗作佛の文を引く。三、無餘界の廻心を辯す。四、一切衆生有性成佛の文を引く。五、定性二乗の永滅の計を斥く。六、無性有情の執を遮す。七、佛性の差別を辯す。八、教の權實を辯す。

一増一減 イチゾーイチゲン (術語)

人間の命が十歳から百年毎に一歳づつ増して八萬四千歳に至り、人壽八萬四千歳に達すると、又百年毎に一歳づつ段々に減じて十歳迄減じて来る。この一増一減の間を一中劫とも呼ぶ。〔参照〕『俱舍論』卷十二。

一即一切 イチソクイツサイ (術語)

緣起説に基いた諸法の圓融相攝の關係を現せる語であつて、いづれの一を擧げて他の一切のものが、其の中に包容せられてゐるいふ意味で、一切は相即不離の關係にあることを示す。主として華嚴宗の所談である。

一即十 イチソクジユ (術語)

華嚴教學にて一物を中心として他の諸法との相即する理を數に依つて説明せるもの。即ち若し一を

以て基數とせば一を離れて二三乃至十ある事なし。故に一即十であり、十即一である。同様に亦、乃至十を基數として他數との關係を見るも同じ。

〔参照〕『華嚴五教章』中

一即多多即一 イチソクタ タソクイチ (術語)

華嚴學に於て萬有の相關無碍なるを一多の數に依つて説くもの。即ち差別せる諸法も其本同一眞如の全現なるが故に、一現象の中に他の多種現象が悉く内在する。即ち多即一である。同様に亦、多種現象の上に緣起の一が悉く行き互るが故に、一即多である。〔参照〕『華嚴五教章』中

一鐵破三關 イチソクハサンカン (公案)

證悟は漸次に一分々々の無明を破することに依つて到達し得らるゝが如きものでなく、直下に此身其儘が「さとり」であり「佛」であると徹見する

所に實現すると云ふ意。一鐵は一本の矢であり、

三關は三界である。即ち一本の矢を以て三界を貫通し、一切の差別を透得して一氣に自己本來佛なりと徹見すること。〔参照〕『碧巖集』第五十六則。

一存一闕 イチソンイツケツ (術語)

『觀無量壽經』の漢譯に二本あり。劉宋元嘉年中に璽良耶舍の譯によるものと、同時代に曇摩密多の譯によるものとあり。この中前者のみ存して後者は現存せず。これを一存一闕といふ。

一代一度大仁王會 イチダイイチドダイニンノウエ (儀式)

天皇御一代の中一度修する仁王會のこと。天皇御即位の時宮中大極殿・紫宸殿以下三十一堂、及び五畿七道の諸國に令して『仁王護國般若波羅蜜多經』を講修せしめて天下泰平、萬民快樂を祈願す

る法會。

一代教 イチダイキヨウ (術語)

釋尊三十五歳の成道より八十歳の入涅槃にいたる四十五ヶ年間の説法の總稱である。一切の經典は佛の教説として傳へられてゐるから、一切經のことを一代教ともいふ。

一代化前 イチダイケゼン (論題)

眞宗にて佛一代の説法は觀經の説法の前序であると云ふこと。之に依つて、聖道の諸經は淨土門の方便教であることを示す。

一代決疑集 イチダイケツギジユ (書名)

一卷、天台宗良源撰。七十七條の問答より成り、主として天台宗義について論述したるものであるが、本覺思想を高調する點から見て平安朝末期のものであるらしい。故に古來眞偽未決となつてゐる

る。

一代結經 イチダイケツキョー (論題)

淨土教にて『阿彌陀經』は佛一代の説法を總結する經典であるとする。淨土宗西山派の善慧、善導の『法事讃』の文に基いてこの説を設け眞宗の覺如『口傳鈔』に専ら此説を潤色し、後、眞宗の學匠之を論ず。

大事 事 イチダイジ (術語)

大事因縁の略。

大事因縁 イチダイジンエン (術語)

大事の因縁。大事の因縁とは能化の佛より言へば衆生を開導して生死を離れしむる因縁のこと。所化の衆生より言へば如説に修行して生死を離るゝ因縁のこと。『法華經』方便品に「舍利弗、云何なるをか諸佛世尊はたゞ大事の因縁を以て

の故に世に出現したまふと名づくる。諸佛世尊は衆生をして佛知見を開かしめ、清淨なることを得しめんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生に佛知見を示さんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見を悟らしめんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見に入らしめんと欲するが故に世に出現したまふ。舍利弗是を諸佛はたゞ大事の因縁の故に世に出現したまふと名づく」

大事後生 イチダイジノゴシヨ (術語)

生類たる我々には後生—死後の生活、即ち生死問題が一大事であるとの意。『改悔文』に「もろくの難行難修自力のこゝろをふりすて、一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生、おんたすけ候へとたのみまうして候」

一大秘法 イチダイヒホー (術語)

一は唯一絶對、秘は秘密、秘妙の義。日蓮宗の根本教理たる三大秘法(本門本尊、本門戒壇、本門題目)を總括したる名稱。即ち南無妙法蓮華經をいふ。

一断一切断 イチダンイツサイダン (術語)

断惑について一惑を断滅する時、自ら一切の惑を断じ得るをいふ。要は一が個在の一でなく一切に即する全一だからである。故に断惑の行に於て、惑體の融通するをいふので、一断を一切断として行を終止するのでは無い。華嚴天台の所説。

一壇構 イチダンカマヘ (術語)

兩壇構に對す。密教にて灌頂の場合、西には金剛界壇、東には胎藏界壇を築く所謂兩壇構なるも、道場の狭き時には、暫らく不二に約して金剛界の

開壇は金剛界壇、胎藏界の開壇の時には胎藏界壇のみを莊嚴するをいふ。

一断悉成 イチダンシツジヨウ (術語)

一断一切断に同じ。

一兒二山王 イチチゴニサンノ (術語)

山僧の、山王よりも兒を愛すを言ふ。七十一番歌合の山法師の歌、「ひえあがるわが一人寝のことはに一ちごならぬ人ぞ戀しき」の評に「一ちご二山王といふことよく思ひよせたり」とある。(參照『謡曲大江山』、『辨慶物語』上。

道 イチドー (人名)

不詳—一七五一。淨土宗鎮西派の學匠、阿譽靈順と稱す。若くして西迎院快譽に従ひ出家修學す。日課六萬遍會て懈らず、三十歳伊勢觀正菴に住持す。兄膽阿發願して八萬四千鋪の曼荼羅を彩繪し

弘通せんとす、師隨喜して其業を扶けんと欲し、淨土曼荼羅を考究し、搜玄並に合解を作る。著述十四部あり、寶曆元年十二月十四日寂。『續日本高僧傳』卷四

不詳——一六七八。淨土宗の僧侶、前蓮社眼譽又は空阿と號し、美作涅槃寺の開山、武藏の産、智譽上人に就いて剃髮受學し、遂に其法を嗣ぎ、淨土宗の法義の流布に務め、元和四年十二月十五日寂。〔参照〕『淨土總系譜』

二 道 イチドー (術語)

一は唯一絶對。道は能通無碍の義。佛果へ到る唯一の道のこと。一乘に同じ。

一度頼みの邪義 イチドダノミノジャギ (術語)

二十邪義の一。一生に一度彌陀を頼めば、往生を得ると云ふもの。これ小兒生るゝや佛前に伴ひ領

解文を誦して彌陀を頼む儀式の意を誤解した所から起る。

一道無爲心 イチドームイシン (術語)

十住心の一。如實一道心・如實知自心・空性無性心等ともいふ。即ち第八住心にて天台の教義が即ちこれに當る。一道無爲とは如實一道とも云ひ、法爾絶對なる眞理の世界を意味するのである。天台の教學は一心三觀・三諦圓融によりて眞如の實相を道破せるも、眞言密教の立場よりすれば、未だ入佛道の初門なりとして第八住心に配す。〔参照〕『秘藏寶鑰』大住心論

一二三五往生 イチニサンゴノオージョー (術語)

善導が雜修の失を示すに用いた語。雜修の者は百人に二人、千人に三五人のみ往生を得との意。

淨土教各派に於てそれ〴〵この文の解釋を異にする。

一 日 戒 イチニチカイ (術語)

八齋戒の一。在家の信者が日出より日没に至るまで一日の間だけ戒律を保つて謹慎しておること。

一 日 經 イチニチキヨ (術語)

追善、廻向のために大勢の人が集つて一日に同一の經典を書寫することで、頓寫會といはる。

『元享釋書』卷四にいふ「南都東大寺の法藏亡母追善のために法華經を一日のうちに寫了す」とけだしこれ頓寫會の嚆矢といふ。

一日不作一日不食 イチニチナサザレバイチニチクラハズ (術語)

佛飯を空費せぬことを言ひ表はした語。百丈懷海、馬祖の侍者をして居た初めから入寂の終りに到る

まで行持綿密にして、年老ひ臘長くるも壯年の大衆と共に力を勵まして作務す。大衆是れを憐んで止むるも肯はず、一日作務の折洒掃の具を藏して與へなかつた。百丈終日食はず默坐した。人之れ問ひしに對しこの語を以つて答へた。この事佳話として叢林に喧傳せらる。

一 如 イチニヨ (術語)

一は絶對不二の義であり、如は無差別平等の理。即ち、絶對平等の眞理のこと。或はその眞理を體現して自己と他の一切と全く無差別一體になりたる當處をいふこともある。轉じては他と融和し同化することを一如すといふ。

一 如 イチニヨ (人名)

支那明の學僧、氏族及び寂年不詳。上天竺寺に住す。『法華科註』並に『大明三藏法數』を撰す。

一 如 觀 音 **イチニヨカンオン** (菩薩)

三十三體觀音の一雲上に坐す。〔参照〕『佛像圖彙』

二。

一 如 秘 事 **イチニヨヒジ** (術語)

眞宗に於て、指方立相の教義を方便とし、無相一如を淨土なりとし、信心も無想離念にして無相一如に契はねばならぬと執する邪義。長門國秋妙光寺圓空の唱ふる所。

一 如 法 界 **イチニヨホウカイ** (術語)

絶對平等の義を顯はす一如と、諸法の體性の義を顯はす法界とを合せたもの。眞如の理を云ふ。

一 如 本 淨 心 **イチニヨホンジヨーション** (術語)

十住心の第八一道無爲心に同じ。

一 寧 **イチネー** (人名)

一二四七—一三一七 支那臨濟宗。一山と號

す。姓は胡氏、宋國臺州の人(浙江省臺州臨海縣

治)。元の成宗、日本を併有せんと志あり、先

づ有道の名僧を遣して勸誘せしめんとて、一寧を

渡航せしむ。正安元年太宰府に着す、北條貞時の

爲に伊豆修禪寺に流されたれども、後、疑ひ解け

て建長寺に請ぜらる。尋いで圓覺、淨智に歷住

し、正安二年、後宇多上皇の勅によりて京都南禪

寺を董す。文保元年四月二十四日寂す。壽七十一。

一 寧弘濟國師の號を給ふ。語録一卷あり。世に一

山國師といふ。

一 念 **イチネン** (術語)

●時尅の一念。短少なる時間を顯はす語。『仁王經』には九十刹那を一念とし、『往生論註』には六十刹那を一念としてゐる。●觀念の一念、心に一

む。『高僧和讃』

一 念 義 **イチネンギ** (術語)

多念義に對す。彌陀の淨土に往生するに、一遍の稱名さへすれば宜しいとする説。法然門下の中に於て、幸西行空の主張する所であると傳へらる。

一 念 喜 愛 心 **イチネンキアイシン** (術語)

一念の信心に同じ。「能く一念喜愛心を發すれば煩惱を斷ぜずして涅槃を得」『正信心佛偈』。

一 念 義 停 止 起 請 文 **イチネンギチヨージノキシヨ**

一 一 一 一 (書名)

『遣北越書』『北國書狀』とも云ふ。一念義を主張

する輩に對し、法然が自らの意志に背くとして承

元三年(一二〇九)六月十九日、之を停止した一

文である。『勅修御傳』第廿九、『漢語燈錄』第

十所收

たび觀念するを云ふ。即ち相好を觀じ、法理を觀

じ、時を觀じ、機を觀する等みなこの觀念の一念

であり、『八十華嚴』卷十三に「一念に普く無量

劫を觀ず」と云へるはこの意である。●稱 名の

一念。佛名を稱すること一聲なるを云ふ。『無量

壽經』の下に「信心歡喜乃至一念」とあるを淨土

宗はこの義に解す。

一 念 往 生 **イチネンオージョー** (術語)

眞宗に於いて、南無阿彌陀佛の謂れを聞いて信ずる一念に往生が決定すると云ふこと。

一 念 歡 喜 **イチネンカンギ** (術語)

一念の信心に同じ。歡喜は信心の異稱。『大無量

壽經』本願成就文の「信心歡喜乃至一念」に基づ

く。「盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつ

ゝ一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらし

一念 慶喜 イチネンキヨーキ (術語)

一念の信心に同じ。慶喜は信心の異稱。「若不生者(ニヤクワシラズ)のちかひゆゑ、信樂(シツラク)まことにときいたり、一念(イチネン)慶喜(キョウキ)するひとは、往生(オウジヤウ)かならずさだまりぬ。」『淨土和讃』

一念 行信 イチネンギヨージン (論題)
行(コウ)一念(イチネン)と信(シン)一念との義を論決するもの。行信(コウシン)一念に同じ。

一念九念邪義 イチネンクネンノジヤギ

(術語)

眞宗の異安心。念とは阿彌陀佛の御名を稱へて極樂往生を願ふこと。所謂稱名念佛であつて『大無量壽經』に乃至一念。即得往生。といふ一念をば、即得往生の因なりと解して、本願の乃至十念の稱名の中で初めの一念を往生の因、後の九念は

佛恩報盡の念佛と解釋するものである。(眞宗の宗意では一念と雖も悉く皆報謝の行であつてそれによつて往生せんとするものではない。)この異安心問題は越後の國に於て寶曆、明和の頃勃發せしものである。

一念 業成 イチネンゴージョー (術語)

多念業成に對す。一念に往生の業事成辨するの意。この一念を解釋するに一遍の稱名のこととする淨土宗系の説と、一念の信心のこととする眞宗の説とある。業事成辨。

一念 三千 イチネンサンゼン (術語)

天台宗の觀法。一念の起る當體の心に十界三千の一切法を具へてゐることを指す。三千とは地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天・聲聞・緣覺・菩薩・佛の十界は圓融の妙理によつて十界各々に十

界を具へてゐる故に百界となり、其の各々の一界に法華經に説く相・性・體・力・作・因・緣・果・報・本末究竟の十如是を具へてゐるから十如となり、更に此の十如を衆生・國土・五陰の三世間に相乘して三千の法となる。これら一切法を包括することになるが、この三千の一切法が念々に全具すると云ふのである。

一念三千覆註 イチネンサンゼンフクチュウ

(書名)

一卷。天台宗圓仁の著にして、一念三千の綱要を説きしもの。

一念成就聞書 イチネンジョウジュキキガキ

(書名)

一卷。蓮如の撰と稱す。如何なる悪人も信の一念に往生決定することを明したるもの。『眞全』所收

一念成佛義 イチネンジョーブツギ (書名)

一卷。最澄撰。法華圓宗は、萬徳圓明の性を明し、一念成佛の義を説くを要旨とすることを述べ、更に偈頌を以て一念成佛の意を明したるもの。『天台小部集釋』所收。

一念相應 イチネンソウオー (術語)

速かに智と境と定と慧とが相應することを云ふ。

一念大刹 イチネンダイリ (術語)

淨土教に説く稱名念佛は、量の問題でなくて、實の問題であるから、信心歡喜して南無阿彌陀佛と一聲する所に往生成佛の廣大な大刹が具足すると云ふこと。

一念多念 イチネンタネン (術語)

○彌陀の名號を一遍稱へること、一生涯多くの念佛を稱へること。彌陀の本願は、念佛する者を

救ふと云ふのであるが、一遍稱へればそれ以上稱へる必要はないのか、一遍ではいけなくて、命のある限り稱へねばならぬのかと云ふ問題が法然の門下の間で疑問となつた所から、法然は之れに答へて、「信をば一念に生るととり、行をば一形に勵むべし」と教へた。即ち一遍でもよいと云ふことは佛の慈悲を示したもので、衆生の心掛は、かゝる慈悲ぞと信じて一生涯稱名すべきであるとするのである。②一念とは信心、多念とは稱名を指す。一念は信心を得て往生決定する時刻、多念はその上の佛恩報謝の稱名を顯はすもの、而して行の多念は信の一念の延長であるから行の多念は信の一念を離れず、而も信は内心であるから裏、行は口業に發動したものであるから表、故に兩者は全く別のものでないことを示す。③信心の上に於

いて一念多念を語るもの。信の多念とは時刻に就いて之を説く。然しこの説には眞宗の學界にも異論がある。

一念多念證文 **イチネンタネンジョーモン**

(書名)

一卷。親鸞作。一念多念文意又は一多證文とも云ふ。正嘉元年八月の撰で隆寛の『一念多念分別事』に引證されてある經釋の要文を抄録して註釋し、一念多念何れにも、偏執すべからざることを示したものの。『眞宗法要』卷二に收む。

一念多念評 **イチネンタネンノアラソイ**

(術語)

彌陀の淨土に往生するには、一遍念佛すればよいと云ふ説と、一生涯命のある限りは稱名念佛しなければならぬと云ふ説との評論。法然の當時そ

の門下の間に此評が盛に行はれて、天聽に達し、聖覺法印之れに奉答したことが『古今著聞集』に見えて居る。

一念多念分別事 **イチネンタネンフンベツノコト**

(書名)

一卷。隆寛作。經釋の文を引いて一念多念の何れにも偏執すべからざるの旨を示したものを。建長七年、親鸞は之れを書寫して門弟に與へ、且つ後には『一念多念證文』を撰して、その中の引用文に註釋を作り、門弟に與へた。『眞宗法要』第三十一に收む。

一念多念文意 **イチンタネンモンイ** (書名)

親鸞作。一卷。一念多念證文と同本。

一念等佛邪義 **イチネントフツノジャギ**

(術語)

眞宗に於ける異安心の一種。一念の信心は其體、佛のまこと心であるから、獲信の衆生は、一念の處に迷の命盡きて無量壽の證の命となり、攝取の光明の中に居れば此土は、即ち無量光明土であると主張するもの、文政の頃、關東地方に行はれた。〔參照〕『二十邪義蛇足』

一念淨信 **イチネンノジョーシン** (術語)

一念の清淨な信心の意。『金剛經』如理實見分第五に「是の章句を聞いて乃至一念の淨信を生ず。」とあり。親鸞の『教行信證』信卷に「無量壽如來會」を引いて「所有衆生無量壽如來の名號を聞いて、乃至能く一念の淨信を發して歡喜愛樂す。」とある。

一念信心 **イチネンノシンジン** (術語)

信仰を得る刹那の端的なると、信相に二心なき所

から信心を呼ぶ語。「我が壽命を説くを聞いて乃至一念信すれば」(『法華經』分別功德品)「一念の信心さだまらん輩は」(『御文章』)一念兩釋。

一念 萬年 イチネンバンネン (術語)
瞬間と長時の融即を示す語。一念は瞬間、萬年は長時のこと。一念即萬年、萬年即一念の意である。一念多劫。念劫融即到同じ。

一念不生即佛 イチネンフシヨソクフツ

(雜語)

心本來是れ佛なれども、妄念起るが故に迷の衆生と爲れり、一念の妄心生ぜざれば是れ即ち佛なり、「華嚴大疏」に曰く「頓教とは但だ一念不生なれば即ち名づけて佛と爲す、地位漸次に依つて説かず、故に頓となす」と。

一念發起鈔 イチネンホツキシヨ (書名)

一卷。三十餘項に分つて一念發起のことを敘したるもの。眞宗の蓮如又は實如の撰であると云ふ説もあるが明かでない。

一念 滅罪 イチネンメツサイ (術語)
多念滅罪に對す。一念の信心又は一聲の稱名に依つて煩惱罪障を消滅すること。眞宗では一念の信心に依つて滅罪すと説き、淨土宗では一聲の稱名で滅罪すと説き、又更に多念滅罪説を主張する。

一念 兩釋 イチネンリヨシヤク (論題)

親鸞の『教行信證』信卷末に、『大無量壽經』の第十八願成就文の一念を解釋して信の一念のこととし、之れに二種の釋を設けてある意義を論決するもの。

市 上 人 イチノシヨニン (雜語)

教法を廣く無知の民衆に弘布せんがために、山林を離れて聚落に入り、身を市井の巷に投じ、形を凡俗に同じて法を説く高僧碩徳のこと。市 聖に同じ。

市 聖 イチヒジリ (雜語)

衆生濟度のために光を和らげ塵に同じて、姿を市井の間に伍し、道を無智の老幼に布く高僧碩徳のこと。村上專精著『眞宗全書』中に空也上人のことを「其の人をして念佛を唱へしむる方法として、市中の童男童女を集め來り、彼等と共に念佛を唱へつゝ、鐘を撃ち瓢を敲き、時に自ら躍りを爲す。其の状恰も狂態に似たりと雖も(中略)、以て群衆を誘引せんとするにあり。是に於て乎、時人呼ぶに市 聖、又彌陀聖の名を以てするに至れり。」

一白三羯磨 イチヒヤクサンコンマ (術語)

白四、或は白四羯磨ともいふ。授戒の作法である。白は表白の義で、大衆中の某に對して今授戒する旨を告げる表白文のこと、羯磨は梵語でカルマ、譯して業或は作業といふ。三羯磨とは三度び受者に戒法を授ける旨を記したる表白文を唱へることである。結局、表白が一度、羯磨が三度都合、四度宣言文の如きものを讀む。それを一白三羯磨といふ。

佛 イチブツ (術語)

台密に於ける四一教判の一。

一佛一切佛 イチブツイツサイブツ (術語)

一佛が即ち一切佛といふ義。各宗にてその説明を異にするれど、つまり佛の自内證は平等の故に、一佛即一切佛であると同時に、一切佛は又た一佛に

還元せらるる故にかくいふ。

一 佛 乘 イチブツジョー (術語)

一切衆生を平等に成佛せしむる教法。乗は教法のこと。一乗におなじ。

一 佛 乘 院 イチブツジョーイン (人名)

眞宗高田派の學匠。眞證に同じ。

一 佛 世 界 イチブツセカイ (界名)

①一人の佛陀の教化する世界のこと。一佛土又は一佛國土といふ。種々異説あるも普通は三千大千世界といふ。②『法華經』本門壽量品にては、更に諸佛總合の本佛を立て、無數の三千大千世界のみならず、十界の總世界大宇宙は、悉皆本佛の世界なりとす。

一 分 家 イチブンケ (術語)

唯識學派にて心作用の分限を論ずるに所謂安難陳

護一二三四の異説あり。安惠論師は識體一分説を主張し、吾人の心識は自體分のみ依他法にして有體なるも、相見二分は遍計所執の無體法なりとす。所謂物無の相見、別無の我法を主張したる安惠論師を一分家と云ふ。

一 鞭 千 里 イチベンセンリ (書名)

一卷。眞宗本願寺派南溪撰。天保十二年一月、東京築地別院に於て、信心正因、稱名報恩の宗意に對し、淨土宗鎮西派の立場から論破を立て、且つ聖典の中、稱名正因に紛はしい文を擧げて大衆を策勵警告したもの、之れを破したものに、若英の『駁一鞭千里』一卷がある。

一 棒 一 條 痕 一 握 一 掌 血 イチボーイチジョーコンイ ツカクイツショークツ (俚語)

『俚言集覽』に云ふ「禪語也。性根をばきと付く

ること。一棒くれて一條の痕つき、一つかみつかんでそこから血が出る。皆はきと氣をつけ戒むることに云ひし語なり」

一 枚 起 請 文 イチマイキシヨモシ (書名)

源空撰。一枚消息・一枚誓文ともいふ、建曆二年正月廿三日、その入寂に近づきし時、門弟の勢觀房源智の懇請に依つて、淨土宗の要義を一紙に記したるもの。眞蹟は京都黒谷金戒光明寺に藏す。

一 味 イチミ (術語)

一相一味又は一味平等とも熟語し、外形は差別するも内心は同一。作用は異なるも、本體は一なるの義。『涅槃經』に「如來の語の一味なるは猶し大海の水の如し」といふが如し。

一 味 安 心 集 イチミアンジンシユ (書名)

一卷。天明六年九月、眞宗本願寺派平乗寺の功存

撰。「頼ます祕事」に類する義邪を破したものを寫傳されてゐる

一 味 安 心 イチミノアンジン (術語)

眞宗に於て多くの人が皆一様の信仰を有することを顯はす語。佛から賜はる信心であるから、善惡智愚の差別なく、平等一味であるとし、従つて其得る證果も皆同一であるとす。

一 味 禪 イチミノゼン (術語)

純一無雜の禪すなはち眞實の佛法のこと。『典座教訓』に「……かくの如きの工夫を作さば、便はち文字上一味の禪を了得し去らむ」とあり。五味禪に對するの語。

一 名 無 量 義 イチミヨームリヨギ (術語)

一つの名目に無量の意味を有すること。たとへば佛・涅槃・解脱・信心等の如し。

一 黙 イチモク (雑語)

第一義諦は言亡慮絶の絶対境なるを以て、言語文字のよく詮表すべきにあらず、黙を以てこれを表象するの外なきを示す意。『維摩經』入不二法門品に「時に維摩詰默然として言無し。文殊師利歎じて曰く、善哉々々、乃至文字語言有ること無し、是れ眞に不二法門に入る」とあるに出づ。

一 盲引衆盲 イチモーシユモローヒク(禪語)
一人の邪解が衆人を邪解に陥らしむるを云ふ。正知見を有せざる師家の言行が、學人を誤らしむるに用ふ。

一 物不將來 イチモツフシヨライ(公案)
空手にして身に一絲を纏はざる如き心境を云ふ。迷はもとより悟をも棄て去り、更に棄て去る意識をも棄て去つた境地のこと。『從容錄』第五十七

則に「嚴陽尊者、趙州に問ふ、一物不將來の時如何。州曰く、「放下着」嚴云く、「既にこれ一物不將來、このなにか放下せん。」州曰く、「恁麼(それ)ならば擔取し去れ」とあり。

一 門 イチモン (術語)
門とは能通、通入、門別の義。生死の迷界を出づる道を門に喩へていふ。

一 門衆・一家衆 イチモンシユ イツケシユ (雑語)
古昔眞宗に於いて用ゐられた格式の名。宗主と同家系の一族の意で、蓮如の頃から始まり、一般僧侶の上に位す。

一 問 訊 イチモンジン (術語)
禪に於ける禮則。「住持並に侍者は、大衆を接入する時、合掌して立つのみ。是を接入一問訊と名

づく。」「(参照)『竺仙小清規』

一 門 普 門 イチモンフモン (術語)

眞言密教の總本尊は大日如來である。阿彌陀觀音等の諸佛菩薩は、此の大日如來の一部分の徳を表すが故に、一門の尊と稱するに對して、大日如來を普門の尊とす。即ち大日如來の總徳を分析的に開展したものが諸佛菩薩であり、諸佛諸尊の徳を綜合統一したものが大日如來である。此の關係を修行の上から一門即普門と説く。『大日經疏』第一に「從此一門得入法界。普入一切法界門也」と出づ。

一 益 二 益 イチヤクニヤク (論題)

眞宗に於て正定聚に入ること、成佛することを一益とするか二益とするかを論決するもの。一益とする説は、正定聚と滅度とは同一益であつて、

滅度を此土で密に得たものが即ち正定聚であるとす。二益説は正定聚は現益で而も密益であり、滅度は彼土の益であるとする。眞宗は二益とするを正義とする。

一 益 法 門 イチヤクホーモン (術語)

眞宗異安心の一。眞宗に於ては正定聚に入ることには獲信の利那に此土に於て得る利益とし、成佛は彼土に往生して得る利益であるとするのに對して、入正定聚と成佛とを一益として此土で獲信の利那に獲る利益とする説。

市 屋 道 場 イチヤドージョー (寺名)

金光寺の別名。時宗市屋派の本寺京都市下京區市姫通新寺町西入る本鹽釜町に在り。開山は空也上人にして本天台宗なりしが、弘安年間に住持唐橋法印胤惠が、恰も參籠せし一遍上人の徳に化し其

の門人となり作阿と改名せし時代より時宗となれり。

市屋派 **イチヤハ** (派名)

時宗十二派の隨一、一遍の弟子作阿俊晴を派祖とす。本山は京都五條金光寺、市屋は往時京都に於ける市場の名。金光寺は東市屋に在りしを以て名とす。現今は廢亡して本宗と合す。

章紐天 **イチユードン** (天名)

毘紐天(ビチュードン)を見よ、

一葉觀音 **イチヨーカーノン** (菩薩)

三十三體觀音の一、一蓮華上に坐し水中に浮ぶ、

〔參照〕『佛像圖彙』二。

一來果 **イチライカ** (術語)

聲聞四果の一。舊譯家は斯陀含果と音譯す。欲界修惑の九品中、初めの六品だけを斷じて、後の三

品の惑が残れる聖者をいふ。後の三品の惑が残れるがため、現生に於いて涅槃に入る能はず、今一度天上界及び人間界に生を受く、故に人天に尙一度往來する聖者といふ意味。

一來向 **イチライコー** (術語)

欲界修惑の九品中、初めの六品の惑だけを斷じた位である。向とは、かく修行することに依つてそれが原因となつて一來果なる結果に趣向するの意で、一來果への豫備行である。

一流 **イチリユ** (術語)

一宗一派にて他と異りて師子相承する流義のこと。即ち師匠より弟子へと嫡々相承して斷絶せざるを河の流れに喩へたるもの、

一類往生 **イチルイオージョー** (術語)

彌陀の淨土には念佛の行者のみ往生して、諸行を

修する衆生は往生を得すと云ふこと。淨土宗西山派に説く所である。同鎮西派が諸行は本願の行ではないけれども、彌陀の報土に往生することが出来るとするに對す。

一蓮院 **イチレンイン** (人名)

眞宗大谷派の學僧、秀存の院號。

一蓮托生 **イチレンタクシヨ** (術語)

共に彌陀の淨土に往生して同一の蓮華の中に生れること。

一藕 **イチロー** (術語)

僧侶の中に於いて智徳年齢の最も高い第一の人。法藕。

一路涅槃門 **イチロネハンモン** (術語)

涅槃に證入する一筋路といふこと、即ち成佛の直道にして、門とは證入の通路。禪宗にては坐禪を

以て成佛の直道となす。

一掛 **イツ** (術語)

禪林の禮法。胸の處に叉手し腰をや、曲げて頭を低れる。もと周禮より出でたる支那の禮法なれども今は禪林の作法に用ゆ。

一海 **イツカイ** (人名)

一一一六―一一七九。醍醐山無量壽院の第二世。字は尊勝、少輔阿闍梨と云ふ、源朝俊の子なり。始め華嚴を學び、後醍醐山に登り定海僧正より傳法灌頂を受け、又松橋無量壽院元海を拜して其の流を受く。故に松橋流の祖と云ふ、治承三年九月二十日寂。壽六十四。〔參照〕『傳燈廣錄』

一階僧正 **イツカイソージョ** (職位)

未だ僧位を経ず、一躍して直に任ぜられたる僧正のこと。藥師寺壹演を以て最初とす。又た法印大

和尚位は僧位の第一階なる故にかくいふ。

一 顆明珠 イツカノミヨージュ (術語)

① 宇宙法界に遍満する眞如の理法に喩ふ。玄沙禪師が學人を接するに常用手段としたるものである。曰く「盡十方世界これ一顆明珠」と。② (書名) 前項の問題を徹底的に論究して、其眞意を發揮したるは道元禪師著「正法眼藏」中の「一顆明珠」一巻である。

一 機 イツキ (術語)

① 根機の意。一機一縁ともいひある特別な機根機類をいふ。② 一機の意。耳根のことをいふ。

一 機一境 イツキイツキヨ (術語)

機は心の働き境は外界の事象で、主観と客觀に相當する。鏡に映る影は境であり、映つた影を人と見、花と見るは機である。若し其れ「一機一境」

の禪と云ふ場合は、見聞覺知の分際と云ふ意味。「ナ、マ半かの理解」とせられる。

一 休 イツキユ (人名)

宗純に同じ。

一 休 骸骨 イツキユガイコツ (書名)

一冊。一休撰。本書は骸骨の夢に託して佛法談をなせるもので、貴賤老若何れも皮もて包みたる骸骨に異ならず、たゞ然乍ら一大事因縁を悟る時は不生不滅の理を知り得るとなし空無我を説く。「一切經八萬法をうちすて、此一巻にて御心得候べし、大安樂の人に御成候べし」と結んである。而して奥に「庚正三年丁丑四月八日虛堂七世東海前大徳寺一休宗純」と記してある。「一休和尚全集」「一休和尚文集」所載

一 休可笑記 イツキユーカーシヨーキ (書名)

五卷。滑稽に作りなせる教訓的物語。卷首に善惡五戒座敷と題せる如く、飲酒戒、殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒の五段に分ち、毎段數項を分ちてその意を敷衍す。

一 休關東咄 イツキユーカーントーバナシ

(書名)

三卷。序によれば、一休咄には關東の事を記せざるが故に、その補遺として出すといふ。寛文十二年開板。「一休衆道ぐるいの事」、「堺の浦にて遊女と歌問答の事」等三十八項を載す。「近世文藝叢書笑話」第六に出づ。

一 任諸國物語 イツキユーシヨクモノガタリ

(書名)

一巻。一休和尚一代の事歴を傳へたもので、専ら諸國遊行中の逸話を記したものである。材料は俗

書俗説から得たもの故奇怪な説多く信憑すべき限りではないが、また一代の活僧の面目を窺ふことが出来る。「一休諸國物語圖會」、五卷は本書に多くの圖を挿入したもので、畫は菱川清春と云ふ。尚「一休圖會拾遺」なるもの二巻あり。

一 休 咄 イツキユーパーナシ (書名)

三卷。一休和尚の逸事を録したるもの。序によれば、日々大徳寺に参りて沙彌喝食等より聴きたるものを輯録すと言ふ。「一休和尚いとけなき時且那と戯れ問答の事」、「一休といふ名の事」等すべて四十七項をのす。「近世文藝叢書」笑話第六に出づ。

一 教 イツキヨ (術語)

台密に於ける四一教判の一。

一 慶 イツキヨ

一三八六——一四六三。臨濟宗僧。字は雲章。京都の人。聖一下奇山圓然の法を嗣ぎ、嘗て後小松上皇の爲めに『元亨釋書』を講ず。東福・南禪等に住す。身を持つること頗る嚴にして、寶徳三年より十七年間一度も身を横たへたることなかりしと云ふ。寛正四年正月寂。壽七十八。『五燈一覽圖』の著あり。〔参照〕『本朝高僧傳』卷四十二。

一 經 其 耳 イツキョーゴニ (雑語)

藥師如來十二願の第七の願。一度その名號を耳にすれば、衆病悉く除き身心安樂ならん願意より出でたる語。

一 境 三 諦 イツキョーサントイ (術語)

隔歴の三諦に對す。天台宗にては吾人の認識するいづれの對象にも各空、假、中の三諦が同時に本質的に存して完全に融合して居るとする。對象に

各々三諦を具へて居るし、それを認識する主觀の一心にも三觀を同時に具足してゐるといふ。一境三諦、一心三觀は天台教學の極致である。之に反して隔歴の三諦とは未だ圓教の理を體認せざる別教の見方で、空假中の三諦は本質的に相異なるものとして相互に融合せざる見解をいふ。

一 境 四 心 イツキョーシシン (譬喩)

一所四見。一水四見に同じ。見る者の立場によりて同一の境も不同に見ゆること。例へば同一の水も天は寶嚴の地と見、人は水と見、餓鬼は膿血と見、魚は住處と見るが如し。

一 篋 四 蛇 イツキョーシダ (譬喩)

『涅槃經』光明遍照高貴徳王品第三に出づる譬喩。四大(地水火風)假和合の我らの身體を四疋の毒蛇を入れし篋に喩へたるものにて、一篋は吾等の

身體、四蛇は身體を構成せる地水火風のこと。即ち人間は何人も毒蛇の篋を持つるが如く極めて不安なるものであることを喩示せるもの。〔参照〕『涅槃經』第廿三。

逸 空 イツクー (人名)

瑞嚴に同じ。

嚴 島 經 卷 イツクシマキョーカン (雜名)

安藝國嚴島神社に藏する處の經卷。清盛を初め平家一門の人々の手に書寫された『法華經』、『觀音賢經』、『無量義經』、『阿彌陀經』、『般若心經』及び清盛の奉納願文を加へて三十三卷。その莊嚴の美、意匠の變、實に現存國寶中の國寶として世界に誇るべきものである。

一 家 イツケ (術語)

他家に簡んで一つの流派を現はす語。「おほよそ

淨土一家に於てそのすゝむるところまち／＼なれども」(『御文章』)

一 化 イツケ (術語)

一代の教化、一期の化導をいふ。『法華玄義』一上に「一期の化導、事理俱に圓なり」とあり。

一 華 開 五 葉 イツケカイゴヨ (術語)

心華の開發すること。即ち修行の功熟して悟りを得るを云ふ。『傳燈錄』第三達磨章に「吾本この土に來り法を傳へて迷情を救ふ。一華五葉を開き、結果自然に成る」と云ふ。佛祖正傳の大法を支那に傳來しよく其效果のあつたことを述べられたるものである。達磨の偈とせられる。

一 華 五 葉 イツケゴヨウ (術語)

華の開くを形容せる語。心華開發の意を表はす。語はもと達磨傳法の偈の「吾本來茲土。傳法救

迷情。一華開五葉。結果自然成」に出づ。

一 家 衆 **イツケンシュ** (雑語)

古、眞宗に於いて用ゐられた格式の名。一門衆。

一 髻 羅 利 **イツケラセツ** (菩薩)

精しくは一髻羅利王菩薩といふ。胎藏界曼荼羅の第一蘇悉地院に住する忿怒尊。大火炎髻にして三目四臂。尙異像存す。之を本尊として一髻羅利法の修法あり。〔参照〕



一 髻 羅 利 尊 陀 羅 尼 經 挿 圖 (高雄曼荼羅の像)

一 間 **イツケン** (術語)

間とは間隔の義。一間の隙ありて涅槃を得ざるが如き、即ち不還阿の聖者が修惑の全部を断じ切ら

ず、なほ一二品の殘餘あるため、更に欲界の生を受くる如き場合を云ふ。

一 呼 **イツコ** (人名)

問鑑に同じ。

一 向 **イツコー** (術語)

ひたすらに。専ら一つ事に專注して、他に心を向けないこと。

一 向 一 揆 **イツコーイツキ** (雑名)

一向宗(眞宗)の門侶が宗門擁護の爲めに起せる一揆騒動を云ふ。元龜元年長崎宗徒の一揆、天正元年越前宗徒の蜂起等はその有名なるものである。〔参照〕村上專精著『眞宗全史』

一 向 記 **イツコーキ** (術語)

四記答の一。又決定答とも云ふ。問者の質問が間

然する所なく、反駁又は否定すべき餘地なき時、一向に決定の答を與ふるを云ふ。例へば「一切の有情(生類)皆當に死すべきや否や」の問に對して、「然り定んで皆死すべし」と答ふる如し。

一 向 義 **イツコーキ** (術語)

眞宗を他宗から呼んだ名前。

一 光 三 尊 **イツコーサンゾン** (雜)

一つの舟形光背(舟後光)内に阿彌陀三尊の立てるを云ふ。善光寺の本尊は之にして、之より同様の形式のものを稱するに至る。

一 向 宗 **イツコーシユ** (宗名)

眞宗の異名。一心一向に彌陀の本願を信じて念佛する宗旨といふ意味にて、古來、眞宗を一向宗と言ひ來れども、是れ他宗他派の徒の眞宗に與へたる俗稱にて、眞宗々徒のみづから名づけたる宗名

にあらず。蓮如の『消息文』中に「經に一向専念無量壽佛とときたまふゆへに、一向に無量壽佛を念ぜよといへるころなるときは、一向宗とまふしたるも仔細なし、さりながら開山はこの宗をば淨土眞宗とこそさだめたまへり、されば一向宗といふ名言はさらに本宗より申さぬなりとしるべし」とあり。以てその起原の古きを知る。

一向宗諸山大系圖 **イツコーシユシヨサンダイケイス** (書名)

二卷。著者未詳、西本願寺・東本願寺・錦織寺・慈敬寺・佛光寺・専修寺・興正寺等の一向宗(眞宗)諸派の系譜を圖說せしものなり。別に『一向宗諸山元大系圖』一卷あり、親鸞の俗系を掲ぐ。

一向小乗寺 **イツコーシヨジョジ** (學派)

一向大乘寺に對す。往古印度にて一向に小乗の教を學修する寺院のこと。〔参照〕天竺三寺。

一向專修 **イツコーセンジュ** (術語)

餘の行業に心を向けず、専ら彌陀の名號を稱念すること、眞宗に於ては、この念佛に眞實(弘願門)と相似(眞門)との二を分つ。眞實の專修は他力の信の上の稱名であり、相似の專修とは、自力の信の上の稱名である。

一向專修七箇條問答 **イツコーセンジュシチカジ**

ヨイモンド (書名)

一卷。法然撰。略して『七條問答』とも云ふ。諸神を信ぜざる事以下七箇條に就いて、智海、重源等各一問を設け、法然之れを決答したもの。後人の僞撰である。『法然上人全集』に收む。

一向專念 **イツコーセンネン** (術語)

他の行業を雜へず、一向に彌陀の名號を稱へること。一心專念に同じ。

一向大乘寺 **イツコーダイジョウジ** (寺名)

印度にて往昔一向に大乘佛教を行學する寺院をいふ。一向に小乗佛教又は大小兼學する寺に簡ぶ語。〔参照〕天竺三寺。

一向派 **イツコーハ** (宗派)

時宗十二派の隨一、一遍の弟子一向を祖とする一派で、本山は近江番場の蓮華寺。

一箇半箇 **イツコハンコ** (術語)

一箇とは一人、半箇とは半人を云ふこと。たとひ一人でも半分でもと云ふ時に用ひられる。如淨禪師が道元禪師へ親囑の語に曰く「城邑聚落に住することなかれ、國王大臣に親近すること勿れ。たゞ深山幽谷に居して一箇半箇を接得して我宗を斷

絶せしむること勿れ」とあり。〔参照〕『建誓記』

根 **イツコン** (術語)

① 一類の根性。一機根のこと。② 眼等の六根の一。

一切 **イツサイ** (術語)

全部を包攝する意。『法苑珠林』二十八に「一は普及を以て言とし、切は盡際を以て語とす」とあり。一切諸佛、一切智、一切經、一切衆生等と熱す。

一切一心識 **イツサイイツシンシキ** (術語)

『釋摩訶衍論』に於ては一般佛教の八識若くは九識の上に更に第十識を説く。此の十識を多一識・一々心識又は一切一心識とも稱す。即ち吾人の意識活動を十種に分ち、前九識は眞理を知らず第十識のみが眞理を辨別する能力を持てる根本の意識

であると説く。尙ほ眞如生滅の三重釋がある。

〔参照〕『釋摩訶衍論』

一切有部 **イツサイウブ** (流派)

具名は「説一切有部」又は有部といふ。小乗廿部の一。

一切皆空宗 **イツサイカイクウシユ**

(宗名)

華嚴宗の賢首に依つて立てられた十宗教判の第七。即ち、諸法は總て皆空なりと立つる宗旨で、般若經等の教理を指す。

一切皆成 **イツサイカイジヨ** (術語)

一切の衆生は皆成佛するといふこと。法相宗に於ては五性各別の先天性を論じ不成佛の類の存在を説くに對して、華嚴・天台・密教等の一乘家に於ては一切衆生は悉く佛性を具有する故に成佛の可

能性をもつといふ。

一切 經 **イツサイキョウ** (經名)

一代藏經。大藏經。藏經ともいふ。佛所説の經律の総合的名稱である。而し乍ら現今では、經の註釋書ともいふべき論藏をも加へて、即ち經律論三藏を一括して一切經と稱してゐる。大藏經を見よ。

一切 經 音義 **イツサイキョーオンギ** (書名)

①二十五卷。唐の玄應撰玄應音義とも云ふ。華嚴經以下四百四十九部の經論に就いて難解の漢字及び音譯の梵語の意義を述べしもの。②百卷。唐の慧琳撰。慧琳音義とも云ふ。建中の末年より元和十二年に至つて著す所、『大般若經』以下支那撰述の護命法に至る迄凡一千三百部、五千七百餘卷中の難語を考す。

一切 經 開題 **イツサイキョーカイダイ**

(書名)

一卷。空海撰。一切の經はその名別々であるが、その所説の眞理(本體)は同一である。然る眞理は佛心にあり、それより流れ出たものが文字であると説き、密教の立場から經・文字・心の三者相對し或は心法二者に對比して一切の文字を釋す。『弘法大師全集』に收む。

一切 行 禪 **イツサイギョーゼン** (術語)

一切の行はみな禪と云ふことである。①迷妄の惑亂を離れた人の行爲は、總て佛法の眞意を外れぬ。②宇宙は法そのものゝ露現する世界であるから、如何なる行も法を外れると云ふことはない。永嘉の『證道歌』に行もまた、禪坐もまた禪とあり。③九種大禪の一。大乘の一切の行法は含攝せざる事なきが故に名く。これに善禪、無記化々禪、

止分禪、觀分禪、自他利禪、正念禪、出生禪、通力功德禪、名緣禪、義緣禪、舉相緣禪、捨相緣禪、現法樂住第一義禪の十三種あり。

一切 經 谷 **イツサイキョーダニ** (地名)

京都東山の地名。『山城名跡志』卷四にいふ「一切經別所粟田口の邊なり」と。曾て行基僧正一切經を納めたるよりこの名起るといふ。現に粟田神社の東南一丁の所にこの名跡存すといふ。

一切 見住地惑 **イツサイケンジュージノワク**

(術語)

五住地の煩惱の一。三界の一切の見惑をいふ。

一切 語言部 **イツサイゴゴンブ** (流派)

説一切有部に同じ。

一切 種 智 **イツサイシユチ** (術語)

三智の一。能く一種の智を以て一切諸佛の道法を

知り、一切衆生の因種を知り一相寂滅の相と種々の行類、相貌、名字等を實の如く知り解するを云ふ。『大般若經』三慧品第七十に「佛の言はく一相なるが故に一切種智と名く、所謂一切法寂滅の相なり。復た次に諸法の行類・相貌・名字・顯示の説、佛は實の如く知る。是を以ての故に一切種智と名く『智度論』卷八十四に之を釋す。即ち諸法の總相(平等相)及び別相(差別相)に通達する智慧である。天台宗にて中觀所成の智、即ち中道智又は、諸法實相智といふ。

一切 所 貴 部 **イツサイシヨキブ** (流派)

正量部に同じ。

一切 所 求 滿 足 功 德 **イツサイシヨグマンゾクタクド**

(術語)

天親の『淨土論』に説く彌陀の國土莊嚴功德十七

種の一。衆生が自利々他するに就いて求むる所の

一切が満足されることを云ふ。

一切世間最勝辯 **イツサイセケンサイシヨーパーン**

(術語)

七辯の一。佛の辯説の巧妙なるを讃嘆せるもの。其の聲は迦陵頻伽の如く、辯舌甚深にして普く一切世間に透徹するを云ふ。

一切 禪 **イツサイゼン**

(術語)

①一切の事、一事一物悉くみな禪と云ふこと。(世界は法(眞理)の顯現せるものとするは佛教の宇宙觀である。法華經に諸法實相とあるは此意味に外ならぬ。これを禪の立場から「一切これ禪」と云ふ。雨竹風聲みな禪を説くと云ふはこれが爲である。②九種大禪の一。自行化他(自覺と他覺)の一切を具備せる禪定。是に世間、出世間の二種

あり。また其所應に隨つて各々三種あり。一現法樂住禪、二出生三昧功德禪、三利益衆生禪である。

一切 智 **イツサイチ**

(術語)

一切智はおよそ三様に解釋さる。一は總じて云ふ一切智、二は二智中の一切智、三は三智中の一切智。總じて云へば一切智は一切の法相及び言教に達せる智慧の意味にて佛智を指す。『法華經』化城喻品に「佛の一切智のために當に大精進をおこすべし」とあるが如し。二智中の一切智は一切種智に對す。即ち差別を照す智慧を一切種智と言ふに對して、平等に徹する智慧を一切智と名づく。『法華經義疏』二に「般若三慧品に云く、一切法の一の相を知るが故に一切智と名づく。又曰く種々の相を知るが故に一切種智と名づく」とある

が如し。三智中の一切智は道種智、一切種智に對す。即ち菩薩の智慧を道種智と云ひ、佛の智慧を一切種智と云ふに對して、聲聞緣覺の智慧を一切智と言ふ。『智度論』二十七に「後品の中に佛、一切智を説くは是れ聲聞辟支佛のこと。道智はこれ菩薩のこと。一切種智はこれ佛のこと」とあるが如し。

一切 智 智 **イツサイチチ**

(術語)

薩羅婆根孃義と音寫し、略して薩般若といふ、聲聞緣覺の智慧たる一切智に選んで、佛の智慧を一切智と云ふ。一切智中の智といふ意味。『大日經』住心品に「一切智々道一味なり。所謂如來解脫味なり」といひ又『理趣釋』に「一切智智は唯佛自證の智なり」といふ。

一切道種智 **イツサイドウシュチ** (術語)

三智の一。

一切如來智印 **イツサイニヨライチイン**

(術語)

胎藏界曼荼羅遍智院の中央にある三角形のこと。遍智印諸佛心印ともいふ。梵名を薩縛但他該多根孃義母捺羅といふ。四種法身の三摩耶形であり、四



一切如來智印

智印の總標なる故にか
くいふ。形像は三角に
して白色、蓮花の上に
あり、光焰周圍を圍繞
する相で、四魔を降伏
し一切衆生を化益する

佛智の象徴とせらる。(参照) 梅尾祥雲著『曼荼羅の研究』

一切有碍 **イツサイノウゲ** (術語)

よろづのさはりあるもの。之れを狹義に解する時は衆生の煩惱惡業を云ふ。廣義に解する時は、一切の障碍の働きを有する、世間の諸法を云ふ。即ち主觀客觀の一切の障碍。

一切 恐 懼 **イツサイノクク** (術語)

有爲の三界に流轉しつゝ、四苦八苦のために脅威され、戦々競々として身心の休まる隙なき状態を云ふ。凡夫の生活のこと。『大無量壽經』の「吾れ佛たるを得ば、普く此の願を行じて、一切恐懼のために大安たらむことを誓ふ」より出づ。

一切遍處道智力 **イツサイヘンシヨドイチリキ**

(術語)

如來十力の一。徧處行智力とも云ふ。如來は迷界たる六道の有漏の行、及び悟界たる涅槃の無漏の行を遍く知る力を具するをいふ。

一切法自性平等無畏 **イツサイホー ジシヨービ**

ヨードームイ

(術語)

一切法平等無畏。又は略して平等無畏といふ。六無畏の一。有爲轉變のはかなき世相に直面しながらも、聖法を確信して心の安らかなことを無畏と云ふ。眞言密教で此の心的過程を六種(六無畏)に分つ中の第五にして、凡てのものはその本質に於て、平等一相であると觀照して心眼を開く境地をいふ。

一切 門 禪 **イツサイモンゼン** (術語)

○一切の事みな禪と云ふこと。一切行禪。一切禪。◎九種大禪の一。一切の禪定みな此門に由りて出るの義。これに有覺有觀俱禪、喜俱禪、樂俱禪、捨俱禪の四あり。

一切 割 **イツサク** (禪語)

割は鍼のこと。痛切なる一問を云ふ。

一 山 **イツサン** (雜語)

寺院はもと阿蘭若と云ひ、世俗を離れたる山林に在るが本格なれば、寺院と山とを同視し、一寺のことを一山と言ふ。但し兩者のあひだに寛狹の差ありて、一山は寛く、一寺は狭し。

一 山 **イツサン** (人名)

一 寧のこと。

佚 山 **イツサン** (人名)

號を默隱、常足道人といふ。天明、寛政の頃出でし大阪の有名なる書僧、寂年未詳。『三體唐千字文』一卷『古篆論語』十卷等著書數部あり。

一 山 國師語錄 **イツサンコクシゴロク** (書名)

一寧の語錄。内題『一山國師妙慈弘濟大師初住四明鰲峰山祖印禪寺語錄』とある。侍者了眞の論集

元祿四年刊行。上卷に、祖印語、寶陀語、建長語、兼住圓覺語、再住建長語、淨智語、南禪語、小參、法語、拈古、頌古。下卷に、偈頌、佛祖贊、自贊、小佛事、行記、宸書國師號、宸書贊、宸書札、應制祭文、大師號宣命を收む。

一 山 國師妙慈弘濟大師行記 **イツサンコクシミヨ**

ジコーサイダイシギヨーキ (書名)

師練、支那の僧一寧一山の道行、經歷を漢文で記したるもの。元亨元年の作『續群書類從』傳部所收

一 山 派 **イツサンハ** (宗派)

日本禪宗二十四流の一。正安元年宋より來朝せる

一山(一寧)を派祖となす。一山は故ありて一時

伊豆に幽閉せられしも、専心化度に從事せしに依

り、後ち建長・南禪等の諸大寺に請聘せられ、門

下に英哲の出づるもの多く遂に一派をなす。

一 糸 イツシ (人名)

文守に同じ。

一 師印承 イツシインジョー (術語)

法統の繼承たる嗣法は必ず一師に限るものにて再び他の師に嗣法せざるを云ふ。曹洞宗にては特に此嗣法を重んずる。宗祖道元禪師の『正法眼藏』中には面授、嗣書の卷ありて、特に詳細に教示する。而るに徳川時代に至つて多師印承の邪風流行したるを慨き宗祖の精神に復歸するの大業を遂げたるは傑僧円山禪師である。〔参照〕『宗統復古誌』

一 師印證 イツシインジョー (術語)

弟子が一人の師匠以外には嗣法せぬこと。曹洞宗では徳川の中世嗣法の制紊れ、名利のために重授(幾人かの師から嗣法する)、代授(代人を以つて嗣法する)盛んに行はれて弊害甚しかりしゆゑ、円山

山道白大いに之れを慨き、同志玄光、天桂、梅峰等と謀り、元禄三年官に訴へ、同十六年聽許され遂に一師引證の古制に復歸した。

一 識 イツシキ (術語)

唯識とも云ふ。唯識論の見地より肥・耳・鼻・舌・身の六根を統制する、更に上位の心の作用を云ふ。特に眞言宗にて諸識を總括して一識といふ。『秘藏記』にいふ「中臺心王の尊を以て、一切の心主を攝す。是を一識といふ」又『釋摩訶衍論』卷二にいふ「一切一心識。阿耨耶識。末那識。意識の四種の一識を立て、諸識を總該す」と。

一 色一香無謝中道 イツシキイツコムヒチユード

一 色一香も中道に非ざるは無しと讀む。如何なる些細なものくだらぬ物でも中道實相の理の具現

たらざるはなしとの意。中道實相觀の極致を道破せる言葉。智顛の『摩訶止觀』に出づ。即ち同書一上に「縁を法界に繋げ、一たび法界を念すれば一色一香中道に非ざるはなし」とあり。

一 色辨道 イツシキノベンドー (禪語)

行住坐臥の間、雑念なく純一専心に修行するを云ふ。道元禪師著『典座教訓』に、「衆僧を供養するが故に典座ありと。古より道心の師僧、發心の高士、充て來るの職なり。蓋し一色の辨道によるか」とあり。典座は食事を調辨するの役である。此の仕事の外に修行、即ち宗教生活を求むべきでない云ふ意味。

一 色邊 イツシキヘン (禪語)

無差別の平等界を云ふ。眞如の世界は一切の差別を懸絶したる、最高統一の境界なること、修行者

は必ず、一度は此處を見徹せねばならぬが、こゝに停頓する時は「已到住著の病」として排斥せられる。

一 子地 イツシジ (術語)

大慈大悲をもつて、一切衆生を我が一子のごとく彌念する心をおこす位のこと。或ひは初地の菩薩を云ひ、時に佛を指すことあり。親鸞の『和讃』に「平等心をうるるときを、一子地となづけたり、一子地は佛性なり、安養にいたりてさとるべし」と。

一指頭禪 イツシトノゼン (公案)

俱胝和尚の庵室に實際と名くる尼僧が來た。笠を取りもせず拄杖を持った儘俱胝の禪牀を三度遮り「道ひ得ば笠を下さん」と三度び云つた。俱胝答ふること能はざりしを慚ぢ、翌日來庵の天龍和尚

に問ふた。天龍はたゞ一指を豎起するのみであつたが、俱胝は是に依て大悟するを得た。爾來、法門を問ふ者があれば必ず一指を豎て、是に答へた。臨終に至て曰く「我れ天龍一指頭の禪を得て一生用不盡」と。たとひ指一本でも、それを正しく理解することが出来れば、それを基本として何事でも解いて行かれると云ふ意。

一 宗 構 イツシユーカーマエ (術語)

徳川時代僧侶に科せし刑罰。所屬の宗門より除藉すること。

一 宿 覺 イツシユクカク (人名)

永嘉玄覺の別名。永嘉初め三藏を探り特に天台止觀の學に精通す、後左溪玄朗の激勵に依り、禪宗の六祖大鑑慧能に參じ、僅に夜宿にしてその印可を受く。人呼んで一宿覺といふ。證道歌一篇は其の

悟境を諷詠したもので禪界に推賞さる。

一 宗 意 得 之 事 イツシユココロエノコト (書名)

一卷。念佛行者の心得八箇條を掲ぐ。蓮如の撰と稱せられて居る『眞宗法要拾遺』卷五所收。

一 出 一 入 イツシユツイチニユ (術語)

一進一退に同じ。禪家にて二人以上で問答商量する場合にその力量が互格なることを表はす。碧巖集第二十三則に「三人同得同證、同見同聞、同拈同用、一出一入、遷に相挨拶す」とあり。

一 處 イツシヨ (術語)

台密に於ける四一教判の一。

一 掌 イツシヨ (術語)

一度手の平で打つこと。禪錄諸所に「一掌を與ふ」の語あり。師家が雲水を指導する際に於ける手段

の一である。

一 生 果 遂 イツシヨーカースイ (術語)

この一生に必ず彌陀の淨土に往生を果し遂げること。彌陀の四十八願の中、第二十願は、彌陀の名を聞いて往生を願求する者は、必ずその志願を果遂せしめることを誓うたもので、古來三生果遂の説が行はれて居たが、『教行信證』化卷の三願轉入の文に依つて、親鸞は一生果遂を誓うたものと解釋して居ると云ふ説がある。係念定生願。

一 處 四 見 イツシヨシケン (術語)

同一の對境を認識し、觀察するに、その能觀者(認識者)の果報異なるが故にその認識にも差異を生ずるといふこと。たとへば同一の非を認むる場合に、天・人・餓鬼・畜生等各々その果報によつて別異の四相分別を生ずる如きを云ふ。また一境四心、

一 水 四 見 とも稱する。唐譯、『無性攝論』卷四には

餓鬼は河泉を見て膿血等の充滿する處と見、魚等の畜生は舍宅遊從の道路と見、天は種々の寶の莊嚴せる地と見、人は清涼の水ありて波浪起ると見ると説いてゐる。

一 生 實 相 イツシヨージツソ (術語)

天台宗に於て、二生法界に對して別教の初地所證を表はす語。一生とは一品の無明を破するを顯はす、即ち別教の初地に至れば一品の無明を破して一分の眞理を證見す。而して此の別教初地の證道は、圓教初住所證の實相に同じ故に古來『初地初住證道同圓』といふ。

一 性 二 修 イツシヨウニシユ (術語)

天台學に於て法身・般若・解脫の三徳を修性の二徳に配し、法身の一を性徳となし、般若と解脫との

二を修徳とするを云ふ。性徳とは先天的徳性であり、修徳とは後天的徳性である。而して今は修と性對論して一性二修と云ふといへども、此の二徳は畢竟不二の上の而二である。

一 生 補 處 **イツシヨーフシヨ** (術語)

次生に妙覺を開いて佛となるべき等覺位のこと。一生とは一生を過ぐればの意、補處とは佛の處を補ふの義。佛の候補。例へば彌勒菩薩の如し。

一 生 補 處 願 **イツシヨーフシヨノガン**

(術語)

『佛說無量壽經』上に法藏菩薩の四十八願を説くなか、第二十二の願に「もし我れ佛をえたらんに、他方佛土のもろくの菩薩衆、我が國土に來生せば、究竟して必ず一生補處に至らん。乃至、もし爾らずば正覺を取らじ」とあり。凡夫淨土に往生

して一生不補を得ずば、誓つて我れ佛と成らじとの願なれば、之を一生補處の願とも言ひ、或ひは必至補處の願とも云ふ。

一 生 不 犯 **イツシヨーフボン** (術語)

字義より言へば所與の禁戒を淨持して一生毀犯せざる意なるも、何時とはなく意味を狭めて、特に不姪戒を指し僧尼の不姪戒を嚴修して一生異性に接觸せざるを云ふ。

一 心 **イツシン** (術語)

衆生の心を以て一切萬有を統一する時に用ゐる語。然るに心を解釋するに種々異説があるから、従つて一心にも諸種の解釋がある。之れを大別すると事と理との二つに分れる。事の一心とは法相宗に於いて阿頼耶識を以て一切萬有統一の原理とするものを云ひ、理の一心とは眞如の理を以て一

心とし、これの展開に依つて萬有があると説くものを云ふ。③實踐上に於いて、心を一所に定めて他想到亂されないことを云ふ。淨土教に於いては信心のことを一心と云ふ。天親の『淨土論』に初めて見え、以後の諸學匠之れを襲用す。

一 心 院 派 **イツシンインハ** (派名)

淨土宗鎮西派の稱念の門流をいふ。稱念は知恩院山内に一心院を開きて、之に住せしが故に斯の稱あり。

一 心 廻 頭 **イツシンエガン** (術語)

①一心に自己の修した善根を廻向して佛國に往生せんと願求すること。善導の『玄義分』「今此觀經は即ち觀佛三昧を以て宗となす。亦た念佛三昧を以て體となす。一心に廻願して淨土に往生するを體となす」②一心は一心歸命の安心、廻願は廻向發

願の意で、一心の別名である。一心を行に望むれば廻向の義があるから廻向と云ひ、果に望むれば願生の義があるから願生と云うたものである。

一 心 戒 文 **イツシンカイモン** (書名)

具名は『傳述一心戒文』三卷。天台宗光定撰。圓頓一乘戒に關する最澄や光定等の奏達文等を集録したもので、叡山の戒壇建設の爲の苦闘の跡を見るに足る。『傳教大師全集』別卷に收む。

一 心 義 **イツシンギ** (術語)

淨土十五流の一。悟阿彌陀佛の所立である。〔參照〕『淨土三國佛祖傳。』

一 心 歸 命 **イツシンキミヨ** (術語)

一心に疑なく佛の仰せに歸順するの意。歸命。

一 心 五 戒 魂 **イツシンゴカイノタマ** (淨瑠璃)

近松門左衛門作。文覺上人が那智の荒行に氣を失つて絶えんとする時、一山鳴動して五色の玉が胸から四方へ飛散する。之を序として、文覺の生涯を夢現のうちに見る筋で、彼の年少の時、按察資方の女、薫姫を繼母の手より救ひ、繼母と通ぜる修験者覺力坊を殺すこと、資方の家來が文覺の叔母の家から物を盗むに會つてその贓品を掠めとらんとすること、且の妻に懸想して誤つて殺すこと、且の子が父を尋ぬるに名を偽つて會ふこと、大和めぐりの途次、醉體をさらすこと等が殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五戒の意をふくめて語られてゐる。最後は袈裟御前が現れて夢中に彼の一生の罪惡を示し、將來戒むべしと告げて終る趣向になつてゐる。

一心五念 イツシンゴネン (論題)

天親の淨土論に説く一心と五念との關係に就いて、眞宗にて一心は安心であり、五念はそれが三業に現れた相貌であつて、恰度、一挙と五指とのやうに、開(五念)合(一心)の相違に過ぎないことを論ずるもの。

一心金剛戒 イツシンコンゴカイ (術語)

一心三觀 イツシンサンガン (術語)

天台宗の觀法。究極の教なる圓教に依つて修行する行者が諸法を觀する時、空觀(物に對する固定的實有的見解を否定すること)假觀(實有的見解を否定するも尙空然のみに陥らず諸法は因縁によつて生じたもの故其の限りに於て暫有的假りの存在と見る)中觀(更に空有の二邊を離れず即せず之を止揚した中道眞實の認識)の三觀を自己

の一心の中に同時に具へて居ると觀するをいふ。又この一心に於ては三觀は別々に分離せずして即空即假即中の圓融の状態にある故圓融の三觀と云ひ、隔歴の三諦より區別され、又これを證得する上に就いて時間上順序次第なきより不次第の三觀と言ひ、又不可思議の三觀ともいふ。この語は大智度論二十七卷に基いたもの。(参照) 一心三智。

一心三智 イツシンサンチ (術語)

天台宗にて圓教に於ては吾々の一心の中に完全圓滿なる佛の智慧なる一切智、道種智、一切種智の三智を同時に具へて居るとする。圓教に至らざる別教に於ては空觀によつて一切智を得、假觀によつて道種智を得、中道觀によつて一切種智を得るやうに漸次階段的に別々に智慧を獲得するのであるが究極の圓滿の教なる圓教に於ては空假中の三

觀を一心の中に具へてゐる故此の三智も亦同時に一心に具はつてゐるとなす。北齋の慧文禪師が大智度論第廿七卷にある「一心の中に一切智、道種智、一切種智を得て一切の煩惱及び習を斷ず(中略)一切一時に得」とある文によつて佛教究極の理を證り、これを慧思に授け、慧思は更に智者大師に授け之を以て天台學の基本的教理となしたものである。

一心三惑 イツシンサンワク (術語)

天台宗にて見思、塵沙、無明の三惑はもとその體別にあらず。一煩惱の精粗の義用に從つて立つる所なれば等しく一心に融會して具する處なりと云ふこと。(参照) 『止觀補行』

一心寺 イツシンジ (寺名)

淨土宗、大阪市南區逢阪上之町に在り。坂松山

高岳院と號し、もと天王寺の別所で源空上人の遺跡靈場廿五ヶ所の第七番である。後白河法皇天王寺行幸の際此所で上人と共に日想觀を修し給ふた。天正年間中興、慶長亂後、徳川家康、大阪城材を以て重修せしめたもの、これ現今の堂宇である。

一 心 常 安 イツシンジョーアン (書名)

本書は世路を通れ佛門に入れる徒が上智も下愚も一心三觀の修行にあらずば、本覺の月を見んこと難しとなして、此理を「知足常樂、知止不恥、屈己處衆、好勝不安、苦樂心變、其境界樂、萬物有變、一心常安、因緣生法即是空、亦名假名亦是中道、修之名一心三觀、已得之諸法實相」の八句に結成して一々句々の説明をなしたものの、序に岩本隱士知足庵とある。「近世佛教集説」所

收。

一 心 正 念 イツシンジョーネン (術語)

一心は信心、正念は稱名。眞實の信心と稱名とを現したるもの。善導の散善義の二河白道の譬喩に西方の阿彌陀佛の喚聲として、「汝一心正念にして直に來れ。我よく汝を護らん。」とある。

一 心 眞 見 道 イツシンシンケンドー (術語)

『唯識論』所明。菩薩無漏の根本智を生じて分別起の二障を斷する(無見道)と、所顯の眞理を證する(解脫道)とは、多利那に涉れども、その相等しきが故に一心といひ、無見・解脫の二道を眞見道といふ。

一 心 制 意 イツシンセーイ (術語)

心を一にして意を制すること。貪・瞋・痴の三毒の煩惱を抑制する事。『大無量壽經』(卷下)に「人能

く中に於て一心に意を制し、身を端し行を正し、獨り諸善を作し、衆惡を爲さざれば、身獨り度脱して、其福徳度世上天洎泥の道を獲」の語に出づ。

一 心 專 念 イツシンセンネン (術語)

一心に佛名を稱念すること。善導の「散善義」に「一心に専ら彌陀の名號を念じて」とあり。

一 身 田 イツシンデン (地名)

三重縣河藝郡にあり、眞宗高田派本山專修寺の所在地、寛正五年高田派第十代眞慧、朽木縣芳賀郡高田から寺を此地に移す。地名の由來は、其身一代を限つて賜うた田地の意から地名となつたものである。

一 心 二 門 イツシンニモン (術語)

一心とは衆生心、二門とは心眞如門・心生滅門を云ふ。此世界は衆生の一心の展開であると、そ

の有様を説いて眞實の世界(心眞如門)と現實の世界(心生滅門)とに分ち、何れも一心の展開であることを示して、兩者に心の字を冠させたのである。『大乘起信論』の根本體系を示す語。

一 心 華 文 イツシンノケモン (術語)

淨土眞宗で天親の『淨土論』は一心の信仰を説いた論であるとして、之れを尊稱した語。親鸞の『教行信證』信卷序「特に一心の華文を聞く。」蓋し『淨土論』の初めに天親が「世尊我一心に」と云へる一心は、十八願の三信を合して一心としたもので、他方の信仰を説き示したものであり、天親の大きな功績であるから、『淨土論』を「一心華文」と稱嘆したのである。

一 心 五 行 イツシンノゴギョー (術語)

天台宗に於て一心の中に因果の功徳を具足するこ

とを示す語。五行の中、聖行、梵行は佳前の行、天行、嬰兒行、病行は佳上の行であるが、聖行は眞諦三昧、梵行、嬰兒行、病行は俗諦三昧、天行は中道王三昧。然るに一心は即空即假即中であるから、五行は一心に即し具足すと云ふこと。

一心 不 亂 **イツシンフラン** (術語)

心を専ら一にして、他のものの爲めに亂されざるをいふ。

一 眞 法 界 **イツシンボツカイ** (術語)

一心法界、一心無礙法界ともいふ。主として華嚴宗に於てその教理の中心を示す標語として用ふる語。唯一絶対なる眞理の世界の意味。即ち主觀的にいへば一心、客觀的にいへば法界なるも一心即法界で、一心がそのまゝ法界であり、法界がそのまゝ一心なることを表現せるものにして、華嚴教

學の理想たる法界に入る(『華嚴經』入法界品に最も鮮明に示す)とは、結局この一眞(心)法界を體驗することである。(参照) 法界『華嚴經』。

一 水 四 見 **イツスイシケン** (術語)

果報の異なるために同一の水に對して各四つの異つた見方をなす、これを一水四見といふ。曰く水を天人は瑠璃と見、人間は水と見、餓鬼は膿血と見、魚は窟宅と見るといふことで、『攝大乘論』第四に「天と人と餓鬼と畜生と果報異なるが故に一水に於いて四相の分別の異りありと見るなり」とあるに出づ。

一 隻 眼 **イツセキケン** (禪語)

禪家に於いて悟りの境地に到達した人を一隻眼を具すといふ。一隻眼は常人の具する兩眼以外の活眼である正しき高き見識である。活眼睛、頂門眼

昭和九年二月廿五日印刷
昭和九年三月二日發行

「佛教文化大講座」
第二回別冊附録
佛教文化辭典

不許複製

編纂者 坂戸彌一郎
發行所 佛教文化大講座刊行會
代表者 兼光豊治
印刷所 巧藝社
發賣所 大風閣書房
合資會社 巧藝社

終

